

## Googleが選ぶ20世紀の名著100選

順位	訳書名(邦訳が無い場合は英語書名)	著者名(アルファベット表記)	著者(カタカナ表記)	出版年	被引用数
1	科学革命の構造	T. Kuhn	トーマス・クーン	1962	14000
2	正義論	J. Rawls	ジョン・ロールズ	1971	7900
3	制度・制度変化・経済成果	D. C. North	ダグラス・C. ノース	1990	7800
4	哲学する民主主義	R. D. Putnam	ロバート・D. パトナム	1993	7200
5	付きあい方の科学	R. Axelrod	ロバート・アクセルロッド	1984	7000
6	集合行為論	M. Olson	マンサー・オルソン	1965	6500
7	Mind in Society※	L. S. Vygotsky	エリ・エス・ヴィゴツキー	1978	5600
8	孤独なボウリング	R. D. Putnam	ロバート・D. パトナム	2000	5400
9	レトリックと人生	G. Lakoff, M. Johnson	ジョージ・レイコフ、マーク・ジョンソ	1980	5300
10	行為と演技	E. Goffman	アーヴィング・ゴッフマン	1959	5200
11	青色本・茶色本	L. Wittgenstein	ルートヴィヒ・ウィットゲンシュタイン	1969	5100
12	人間行動の形成と自己制御	A. Bandura	アルバート・バンデューラ	1971	5100
13	社会理論の基礎	J. Coleman	ジェームズ・コールマン	1990	5000
14	民主主義の経済理論	A. Downs	アンソニー・ダウNZ	1957	4900
15	人間性の心理学	A. Maslow	アブラハム・H. マズロー	1954	4700
16	生態学的視覚論	J. J. Gibson	ジェームズ・J. ギブソン	1979	4700
17	論理と会話※※	P. Grice	ポール・グライス	1989	4600
18	言語と行為	J. Austin	ジョン・L. オースティン	1960	4600
19	ゲームの理論と経済行動	J. von Neumann, O. Morgenstern	フォン・ノイマン、オスカー・モルゲンシュテルン	1944	4500
20	想像の共同体	B. Anderson	ベネディクト・アンダーソン	1983	4500
21	監獄の誕生	M. Foucault	ミシェル・フーコー	1975	4400
22	資本主義・社会主義・民主主義	J. A. Schumpeter	ヨーゼフ・A. シュンペーター	1942	4400
23	システムの科学	H. Simon	ハーバート・サイモン	1969	4400
24	The Rise of the Network	M. Castelles	マニエル・カステル	1996	4300
25	Society and the Adolescent Self-Image	M. Rosenberg	モリス・ローゼンバーク	1965	4300
26	ミニマリスト・プログラム	N. Chomsky	ノーム・チョムスキー	1995	4200
27	思考と言語	L. S. Vygotsky	エリ・エス・ヴィゴツキー	1934	4200
28	暗黙知の次元	M. Polanyi	マイケル・ポランニー	1967	4200
29	近代とはいかなる時代か?	A. Giddens	アンソニー・ギデンズ	1990	4200
30	幼児期と社会	E. H. Erickson	エリック・H. エリクソン	1950	4200
31	オーガニゼーションズ	H. Simon, J. March	ハーバート・サイモン、ジェームズ・マーチ	1958	4200
32	経済発展の理論	J. A. Schumpeter	ヨーゼフ・A. シュンペーター	1912	4100
33	ポストモダニティの条件	D. Harvey	デヴィッド・ハーヴェイ	1989	4100
34	雇用・利子及び貨幣の一般理論	J. M. Keynes	ジョン・M. ケインズ	1935	4100
35	A Treatise on the Family	G. S. Becker	ゲーリー・S. ベッカー	1981	4100
36	科学的発見の理論	K. Popper	カール・ポパー	1935	3800
37	ディスタンクシオン	P. Bourdieu	ピエール・ブルデュー	1979	3800
38	文法理論の諸相	N. Chomsky	ノーム・チョムスキー	1965	3700
39	Outline of a Theory of Practice ※※※	P. Bourdieu	ピエール・ブルデュー	1972	3700
40	危険社会	U. Beck	ウルリッヒ・ベック	1986	3700
41	現実の社会的構成	P. L. Berger	ピーター・バーガー、トーマス・ルツクマン	1966	3700
42	統率・束縛理論	N. Chomsky	ノーム・チョムスキー	1981	3600
43	社会的選択と個人的評価	K. Arrow	ケネス・アロー	1951	3600
44	Human Problem Solving	H. Simon	ハーバート・サイモン	1972	3600
45	「信」無くば立たず	F. Fukuyama	フランシス・フクヤマ	1995	3400
46	自由と経済開発	A. Sen	アマルティア・セン	1999	3400
47	オリエンタリズム	E. Said	エドワード・サイード	1978	3400
48	精神・自我・社会	G. H. Mead	ジョージ・H. ミード	1934	3300
49	Judgement under Uncertainty	D. Kahneman, P. Slovic, A. Tversky	ダニエル・カーネマン	1982	3300

50	ジェンダー・トラブル	J. Butler	ジュディス・バトラー	1990	3200
51	The Constitution of Society	A. Giddens	アンソニー・ギデンズ	1984	3200
52	経営行動	H. Simon	ハーバート・サイモン	1947	3200
53	スティグマの社会学	E. Goffman	アーヴィング・ゴッフマン	1963	3200
54	対人関係の心理学	F. Heider	フリッツ・ハイダー	1958	3200
55	母子関係の理論	J. Bowlby	ジョン・ボウルビィ	1969	3200
56	人的資本	G. S. Becker	ゲーリー・S. ベッカー	1964	3200
57	精神の生態学	G. Bateson	グレゴリー・ベイトソン	1972	3000
58	精神のモジュール形式	J. Fodor	ジェリー・フォード	1983	2900
59	行動の機構	D. O. Hebb	ドナルド・O. ヘップ	1949	2900
60	The Architecture of Cognition	J. R. Anderson	ジョン・R・アンダーソン	1983	2900
61	社会理論と社会構造	R. K. Merton	ロバート・K. マートン	1957	2800
62	経験と教育	J. Dewey	ジョン・デューイ	1938	2700
63	Bodies that Matter	J. Butler	ジュディス・バトラー	1993	2700
64	意味の復権	J. S. Bruner	ジェローム・S. ブルーナー	1990	2700
65	ミシェル・フーコー思考集成	M. Foucault	ミシェル・フーコー	1980	2600
66	文法の構造	N. Chomsky	ノーム・チョムスキー	1957	2600
67	モダニティと自己アイデンティ	A. Giddens	アンソニー・ギデンズ	1991	2600
68	可能世界の心理	J. S. Bruner	ジェローム・S. ブルーナー	1986	2600
69	民主主義と教育	J. Dewey	ジョン・デューイ	1916	2500
70	解明される意識	D. Dennett	ダニエル・デネット	1991	2500
71	プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神	M. Weber	マックス・ウェーバー	1904	2500
72	社会体系論	T. Parsons	タルコット・パーソンズ	1951	2500
73	脱工業社会の到来	D. Bell	ダニエル・ベル	1973	2400
74	ポストモダンの条件	J. F. Lyotard	ジャン・F. リオタール	1979	2300
75	心の概念	G. Ryle	ギルバート・ライル	1949	2300
76	認知言語学	G. Lakoff	ジョージ・レイコフ	1987	2300
77	危険・不確実性および利潤	F. H. Knight	フランク・H. ナイト	1921	2300
78	アナーキー・国家・ユートピア	R. Nozick	ロバート・ノージック	1974	2200
79	言語を生み出す本能	S. Pinker	スティーブン・ピンカー	1994	2200
80	個人的知識	M. Polanyi	マイケル・ポランニー	1964	2200
81	アサイラム	E. Goffman	アーヴィング・ゴッフマン	1961	2200
82	The Power of Identity	M. Castelles	マニエル・カステル	1997	2200
83	知覚の現象学	M. M. Ponty	M. メルロ＝ポンティ	1945	2100
84	グラムシ獄中ノート	A. Gramsci	アントニオ・グラムシ	1975	2100
85	言語行為	J. R. Searle	ジョン・R. サール	1969	2100
86	性の歴史	M. Foucault	ミシェル・フーコー	1984	2100
87	文明の衝突	S. P. Huntington	サムエル・P. ハンチントン	1996	2100
88	資本主義と自由	M. Friedman	ミルトン・フリードマン	1962	2100
89	真理と方法	H. G. Gadamer	ハンス・G. ガダマー	1965	2000
90	存在と時間	M. Heidegger	マルティン・ハイデガー	1926	2000
91	論理哲学論考	L. Wittgenstein	ルートヴィヒ・ウィットゲンシュタイン	1921	2000
92	Political Liberalism	J. Rawls	ジョン・ロールズ	1993	2000
93	自己の分析	H. Kohut	ハインツ・コフート	1971	2000
94	大転換	K. Polanyi	カール・ポランニー	1944	2000
95	福利経済学	A. Pigou	アーサー・C. ピグー	1920	1900
96	さまよえる近代	A. Appadurai	アルジュン・アパデュライ	1996	1900
97	哲学と自然の鏡	R. Rorty	リチャード・ローティ	1979	1900
98	名指しと必然性	S. Kripke	ソール・A. クリプキ	1980	1900
99	自己の修復	H. Kohut	ハインツ・コフート	1977	1900
100	認識と関心	J. Habermas	ユルゲン・ハバーマス	1968	1900

※ ヴィゴツキーの死後英訳され、編纂された論文集である。

※※ 本書は論文集であり、中に収録されている同名の論文が単独で4700件の被引用数だったため

※※※ Esquisse d'une théorie de la pratique, précédé de trois études d'ethnologie kabyleの英訳

原著言語

英語

ドイツ語

フランス語

ロシア語

イタリア語

Google Scholar は、学術論文や学術書の被引用数を表示することができる。そこでこの仕組みを用いて、20世紀（1901年～2000年）に出版された文系の学術書の中で、どの本が多く引用されているかを100位まで調べてみた。以下にはその結果を載せる。

### はじめに

巨大な対象の全貌を見通すには、対象から距離を取らなければならない。21世紀になってからの7年という期間は、20世紀という巨大な対象の全貌が姿を現すのに十分な時間であったかどうかは分からないが、20世紀にはどのような著作が出版されたのかを纏めてみようと思いついたのは、著作の被引用数、すなわち任意の著作が他の著作にどれだけ引用されているかが、Google Scholar を用いて調べられることが分かったからである。この小論の目的は、被引用数という指標を用いて、20世紀の文系学術書のランキングを作ることである。以下には、「文系学術書」という限定が必要であった理由を記そう。

ある著作の被引用数という指標は、その著作が学術の世界でどれだけ影響力があったかを客観的に知る手がかりになる。被引用数という指標は、引用し、引用される著作のネットワークの中で、任意の著作がどのようなポジションにいるかを反映するのである。それゆえ、被引用数で著作の優劣を判定できるのは、他の著作に引用されることを期待して書かれた著作の範囲内ではない。このことから、詩集や小説を被引用数でランキングすることは適切ではないことは明らかだろう。詩集や小説は、引用されるために書かれた著作ではないため、どれだけ多く引用されているかということが、その著作の質を全く反映しないのである。私が「学術書」という限定をつけたのはこのためである。「学術書」とは「引用されることを期待して書かれた著作」のことである。

「文系」という限定をつけたのは、今回作成したランキングが本のランキングであることの必然的な帰結であった。文系、理系などという違いが学問の対象の側に存在しているわけではないが、文系と見なされる領域では、学者は本を出版することで自らの研究成果を公表する慣習が存続している。一方理系とみなされる領域では、研究成果の公表は専ら専門学術雑誌への投稿という形で行なわれている。つまり、20世紀に理系分野で影響力の大きかった研究成果の大半は本にはなっておらず、本になっているとしても、それは教科書になってしまうのである。巷で見かける名著のリストでは、表のほとんどが小説や文系の本で占められている中に、取って着けたようにアインシュタインの『相対性理論』が入っていたりすることがある。しかし、このような節穴だらけの配慮はナンセンスであるし、名著を集めてくれば理系分野の重要な研究の動向も把握できる、という誤解を生み出しかねず、有害でもある。私が文系の学術書に的を絞ってランキングを作るのは、このような理由からである。「文系」とは、「学者が本で自らの研究成果を公表することが多い学

術領域」という意味で理解してほしい。

このような分野として、哲学、言語学、社会学、法学、経済学、政治学、地理学、歴史学、心理学、教育学、科学哲学、人類学を含めることにする。経済学では雑誌投稿による研究発表のウェイトが大きい、自らの立場を本で表明するという文化も存在しているので、これに含めることにした。

## 方法

日本語版 Wikipedia において、「哲学者」「言語学者」「思想家」「社会学者」「法学者」、「経済学者」、「政治学者」、「地理学者」、「歴史学者」、「心理学者」、「教育学者」、「科学哲学者」、「人類学者」のリストのうち、項目が立てられているすべての学者の名前に関して、その名前で Google Scholar の検索をかけた。Google Scholar は、その名前を著者とする著作を被引用数の多いものの順に表示するシステムになっている。そこで、被引用数の多かったもののうち、書籍であるものを記録に取り、最後にエクセルでソーティングをして表を作成した。被引用数は日々変化するので、下 2 桁は切り捨てた。なお以上の調査は、2007 年 8 月 28 日から 9 月 5 日にかけて行った。

次に、東京大学 OPAC を用いて、その著作に邦訳が出ていないかを調べ、邦訳が出版されているものに関してはその邦題を、出版されていないものに関しては英語版の題を調べた。また、東京大学 OPAC と、Wikipedia 英語版を駆使して、原著の言語と、原著の出版年も調べた。

## 結果

被引用数が上位に来ると思われた 153 件を記録に取り、ソーティングして 100 位までのランキングを作った。結果は上に載せたとおりである。

以下では、「20 世紀の文系学術書」という条件を満たさなかったために除外された若干の著作について記しておく。

20 世紀に出版されたという条件を満たさなかったものをいくつか挙げると、アルフレッド・マーシャルの『経済学原理』（4300 件）は、原著出版年が 1891 年であるため除外された。同様にジグムンド・フロイドの『夢判断』（2100 件）も、出版年が 1899 年であるため除外された。逆にジョセフ・E. スティグリッツの『世界を不幸にしたグローバリズムの正体』（2000 件）は、出版年が 2002 年であるために除外された。

書籍ではなく論文であったために除外されたものをいくつか挙げると、アルバート・バンデューラの“Social Cognitive Theory”（6800 件）、ダニエル・カーネマンの“Prospect Theory”（6000 件）、ジェームズ・コールマンの“Social Capital in the Creation of Human Capital”（5200 件）、マーク・グラノヴェッターの“The Strength of Weak Tie”（5100 件）、N. グレゴリー・マンキューの“A Contribution to the Empirics of Economic

Growth”（3300件）、ジョージ・アカロフの“The Market for “Lemons””（3000件）などがある。ポール・グライスの“Logic and Convention”（4600件）は、この論文を含む論文集が本として出版されていることを知っていたので、その論文集を著作として認めることにした。

文系という条件を満たさなかったために除外された書籍を挙げると、ベンワー・B. マンデルブロの『フラクタル幾何学』（9600件）、リチャード・ドーキンスの『利己的な遺伝子』（4000件）、デヴィッド・マーの『ヴィジョン』（3300件）などである。これらはいずれも、もともとの専門分野に留まらず、学際的な影響を与えた著作であり、「20世紀の名著」に数え上げられてしかるべきだと思うが、これらの本を認めると芋づる式に他の本も認めなければならないので、除外することにした。

## 考察

被引用数でランキングを作ることの最大の長所は、著作の影響力についての客観的な評価ができる点である。この点は、このランキングが誇ってよい強みである。出版社や書店でも、「20世紀の名著」と称して本のリストを作ることがあるが、これらのリストは、おそらく数人の読書家や知識人が集まって決めたものであり、どうしても取りこぼしや選考委員の専門分野への偏見が除外できないだろう。

被引用数というのは、学問の素人である一般の読者への影響の大きさではなく、学問のプロたる学者への影響の大きさを反映している。このことは、20世紀の中で、真に重要であった著作がどれであったのかを明らかにする上で、有利な特徴であると思う。なぜなら、第一に、一般の読者よりも学者の方が、自分の専門とする分野の著作の重要性に関してより適確な判断ができるからである。そして第二に、学者は影響力を持つ存在であり、学者が引用するということは、学者の影響力を介して、その著作が影響力を間接的に拡大させていることになるからである。

しかし、被引用数を基にしたランキングには、種々のバイアスが存在することも認めなければならない。

第一のバイアスは、より早くに出版された書物の方が有利だという点である。1901年に出版された本は、1990年に出版された本よりも10倍の期間だけ引用してもらうチャンスがある。ところが、結果はここから予想されるのとは全く逆であった。以下の表は、出版年を10年ごとに区切って、ランキング入りした著作の数を集計したものである。

出版年	冊数
1901～1910	1
1911～1920	3
1921～1930	3

1931～1940	5
1941～1950	8
1951～1960	10
1961～1970	17
1971～1980	20
1981～1990	19
1991～2000	14

表を見ると、20世紀前半の著作よりも、20世紀後半の著作の方が100位以内により多く名を連ねていることが分かるだろう。どうしてこのような結果が生じたのだろうか。上述のバイアスをひっくり返してしまうほどに、20世紀前半は生産性の低い時代であり、20世紀後半は多産な時代だったということなのだろうか？

おそらくそうではないだろう。第一に、著作が引用される頻度は、出版から時間を経ると急激に下がっていくものである。また、書物や学術雑誌の出版の総数は、時代が下るほど増加している。すると、過去の著作は、出版当時に高い割合で他著に引用されたとしても被引用数をそれほど稼ぎ出すことができず、近年の著作は、それと同じ割合で他著に引用されるだけで高い被引用数を叩き出してしまふ、ということがありうると考えられるのである。この仮説が正しいとすると、上に述べたのとは逆に、比較的新しい著作の方が有利になるようなバイアスが存在していることになる。もっとも、パラドキシカルな結果は、単に、Google Scholar がインターネットからアクセスしにくい著作を正しく評価できていないために生じたものなのかもしれない。この点は後述することにする。

第二のバイアスは、言語の壁である。ある著作が引用されるためには、その著作が多くの人々が読める言語で書かれていなければならない。具体的には、著作は、英語でなければ引用されないのである。仮に革新的な著作が日本語で書かれても、その著作は高い被引用数を叩き出すことはできない。ゆえに、言語の壁によってランキング入りを阻まれている、隠れた名著が数多く存在していることになるのではないか？だが、これに対しては再反論が可能である。もし、ある著作が真に革新的なものであるなら、それは英語に訳されるはずである。そして英訳されたその著作が高い被引用数を稼ぎ出すだろう。もう一つの反論：ある学者が真に有能な学者であれば、彼は英語を必ずや習得し、英語で著作を書きださう。これは両方とも大方向正しいと思う。具体例を挙げれば、ロシア語で書かれたヴィゴツキーの著作や、フランス語で書かれたフーコーの著作や、ドイツ語で書かれたウイトゲンシュタインの著作は、真に革新的であったため、英訳され、高い被引用数を獲得したのである。第二に、ハンガリー生まれのマイケル・ポランニー、スペイン生まれのマニエール・カステル、インド生まれのアマルティア・センは、とびきり優秀であったために、母国語ではない英語で著作を書くことができたのであった。

第三のバイアスは、自らの研究成果を本で発表する割合が高い領域の方が、不利だとい

うことである。10ページの論文に引用されても、1000ページの大著に引用されても、引用数のカウントとしては1回である。したがって、研究成果を小出しにして、論文で発表するのが一般的な研究領域の著作の方が、高い被引用数を得ることができるのである。フランス現代哲学の分野から、ジャック・デリダやジル・ドゥルーズがランキング入りを果たせなかったのは、おそらくこれが原因である。

第四のバイアスは、著作が真の名著であるかどうかに関わらず、著作を書くときに引用しなければならない著作が高い被引用数を獲得してしまうという点である。このバイアスは、被引用数で著作を評価する手法の本質的な欠点である。ランキングの上位を見てみると、用語を流行させた学者が散見される。誰もが知っている例を挙げると、クーンは「パラダイム」、マズローは「自己実現」、エリクソンは「モラトリアム」や「アイデンティティ」、シュンペーターは「イノベーション」、ベッカーは「人的資本」という言葉を流行させた張本人である。少し専門的な例を挙げるなら、サイモンは「限定合理性」、ギブソンは「アフォーダンス」、ポパーは「反証主義」、ウィトゲンシュタインは「言語ゲーム」、マイケル・ポランニーは「暗黙知」、ボウルビィは「分離不安」というように、それぞれキーワードが連想されよう。そして、その用語の発端となった著作は、そのキーワードに言及する際に引用しなければならないために、被引用数が激増することになるのである。もっともこれに対しては、言葉を流行させたということは、真の名著であることの十分条件である、という反論があるかもしれない。

最後に、被引用数を Google Scholar で調査したこと付随する限界を指摘しよう。Google Scholar が把握している論文や書籍は、インターネット上からアクセスできるものに限定されている。つまり、紙媒体でしか存在が確認できない論文や書籍は無視されているわけである。すると、古い著作は、それを引用する著作の少なからぬ部分が紙媒体でしか手に入らないため、被引用数が過小評価されてしまっていると思われるのである。

また、明らかにランキング入りしていてよいはずの著作がランキングに入っていないということがある。私は哲学の分野にしか詳しくないので、哲学の分野の例しか挙げることができないが、ウィトゲンシュタインの『青色本・茶色本』および『論理哲学論考』がランキングに入っているにもかかわらず、彼の『哲学探究』が入ってこないのは、明らかに Google Scholar のエラーである。そしてこのようなエラーは、他の学問分野でも多々存在することが推測されるのである。

## 最後に

上述したように、被引用数に基づいたランキングには様々なバイアスが入り込んでいるので、順位にはたいした意味はないと私は考えている。しかし他方で、私は、100冊のリストに上がった著作の大半は、実際に後世に受け継がれるべき20世紀の名著であると信じている。このリストが、新たな著作や著者との出会いのきっかけになってくれれば幸いである。